

〈総説〉

道徳性発達とジェンダーの問題

—Kohlberg & Gilligan 理論再考—

山岸 明子*

Moral development and gender:
Reconsideration of Kohlberg's and Gilligan's theory

Akiko YAMAGISHI*

Abstract

The issues surrounding moral development and gender have been discussed vigorously not only in the sphere of moral psychology but also in various spheres since Carol Gilligan published “In a different voice” in 1982. In it she criticizes Kohlberg’s theory of moral development because it considers only the dominant way of moral thinking (justice orientation) in a male-centered society, ignoring the female voice, and because it regards care orientation that a female often uses as at a low level, though it is an alternative path of development constructed by interpersonal experience which females are apt to have.

In this article, we discuss the controversy around Kohlberg’s and Gilligan’s theory, by surveying the results of empirical studies accumulated these 20 years and more, and by interpreting literary works which describe the confrontation of two moral orientations, Jung Chang’s “Wild Swan” and Shusaku Endo’s “Silence”, and discuss the contribution and limitations of Gilligan’s theory. Empirical studies show that there are few gender differences in moral orientation, and both justice and care are apt to be used by males and females, and factors determining which orientation they use depend in many cases on the type or nature of the moral problem (for example, hypothetical vs real life, impersonal vs personal dilemma). The accumulated evidence doesn’t support Gilligan’s claims, but she makes some contributions: by her claims 1) developmental psychologists can consider development from a multiple perspective, 2) the importance of care is recognized and developmental study in adulthood is activated, and 3) it causes care ethics and narrative studies to prosper. It is suggested that it’s necessary to clarify the common bases of two paths of development, and the factors in interpersonal experience that brings together two different orientations.

Key words: moral development, gender, Kohlberg, Gilligan

1. はじめに

心理学における道徳性研究は、1960年代頃までは、主として精神分析理論及び行動主義の立場から社会的学習を考える社会的学習理論から検討がなさ

れ、大人や社会が示す規範を内面化することが発達ととらえられていた。それに対し Kohlberg は、Piaget の考えを発展させて、規範がどのように内面化されるのか、正しさはどうとらえられるのかの観点から道徳性発達を考える認知発達理論を提唱し^{12)~15)}、道徳性研究が活性化された。Kohlberg 理論をめぐる研究が盛んに行われ、様々な視点から批判もなされたが、Gilligan は Kohlberg 理論が男性

* 順天堂大学スポーツ健康科学部
School of Health and Sports Science, Juntendo
University

中心社会で顕在的なものだけを取り上げていることを批判した。その著書“*In a different voice*”(邦訳は「もうひとつの声」)が1982年⁵⁾に公刊(その一部は論文の形で1977年公刊⁶⁾)されて以来、ジェンダーと道徳性をめぐる問題は、道徳性心理学だけでなく様々な領域で活発に論議されてきた。日本でも1986年に翻訳書が出版され⁵⁾、山岸も Kohlberg の翻訳書¹²⁾の解説で Gilligan 理論を紹介し²⁹⁾、また日本の道徳性発達との関連³⁰⁾³¹⁾やその理論的な意味³²⁾³³⁾を論じたりしてきた。本稿では Kohlberg 理論と Gilligan 理論をめぐる論争について、20数年の間に蓄積されてきた実証的研究の成果や、論争と関連すると思われる文学作品を示しながら考察を行い、また2つの道徳性が異なった対人関係に由来するとする仮説について論じ、最後に Gilligan 理論の意義と限界について論じる。

2. 2つの道徳性発達

Kohlberg¹²⁾¹³⁾は認知発達理論の立場から、Piaget 理論を精錬化した6段階から成る道徳性発達理論を提唱した。Kohlberg の道徳性は「公正さの道徳性(morality of justice)」であり、欲求が対立する事態でそれらをいかに調整して公正な解決をなすかが道徳性の問題として問われる。そして普遍的な原則に則って、どの人に対してもどの状況でも正しいこと、公正であることが目指される(普遍化可能性の増大)。発達が進むにつれ考慮される視点が広がり、個々の状況に対応するのではなく、全体を貫く原則に則り、個々の状況を超えてどの視点から見ても正しいことに志向するようになるとされる。

それに対して Gilligan⁵⁾⁶⁾は道徳や自他の関係を語る時、女性は男性とは違った語り方をすることに気づき、Kohlberg の道徳性発達理論は男性の発達過程を描くものであること、男性中心社会で顕在的なものだけを取り上げて、その枠組みだけで発達を論ずることの問題性を指摘した。女性はその枠組みでは低レベルとみなされてしまうが、女性はそれとは異なった筋道を辿るとして、もう一つの「配慮と責任の道徳性(morality of care & responsibility)」を提

言した。この道徳性では「何が公正なのか」ではなく、他者への共感や関係性に基づく判断がなされ、自分とつながりをもつ他者に配慮して他者を傷つけないことが考慮される。抽象的な原則ではなく、個々の状況で一人一人を具体的に尊重し、配慮される必要性に応答する責任を果すこと、関係性の中でその要求に応じることに志向する道徳である。

3. 2つの道徳性発達とジェンダー

Gilligan は2つの道徳性発達を「男性・女性の道徳性」として問題提起をしたが、それは2つの異なる思考形態及び発達過程があるという提言であり、性差そのものに特化したわけではなかった。しかし Gilligan の提言は女性の共感をひきおこし、またフェミニズムからも大きな関心を寄せられた。

Gilligan が今まで語られなかったことに耳を傾け、それまで取り上げられなかった女性の声、女性の経験や価値観を積極的に表現していることが肯定的に評価され、更にその女性のあり方が男性の発達過程から見て低レベルなのではなく、別の発達過程であるとしたことが男性優位の発達観に対する異議申し立てとして大きく取り上げられた。一方で女性は配慮と責任の道徳性をもつとすることは、「ケアの役割は女性のもの」とするような男性に好都合なステレオタイプの女性観を強め、女性の抑圧の再生産につながるという批判もされた。

Gilligan の問題提起に対して、Kohlberg は以下のような回答を素早く寄せている¹⁴⁾。彼の発達段階が男性のものだとする批判は、初期の評定法にはあてはまるかもしれないが、改訂後は性差はなく、Gilligan の批判はあたらない。確かに Gilligan の提唱する発達も道徳性領域にはあり、道徳性の範囲を広げる必要はあるかもしれないが、発達段階を成す普遍的・形式的な発達過程は Kohlberg の道徳性である。

その後、道徳性とジェンダーの関連に関する多くの検討がなされたが、実証研究をまとめると、Kohlberg の発達段階において性差はないという結果であり、80の研究における152のサンプルの内86

%は差がなく、9%は男性が高く、6%は女性が高かった。性差が見られる場合は教育程度や職業が関与していることが示された²⁵⁾。

Gilligan は配慮と責任の道徳性も発達段階をなすとして、3段階説を提唱し、自分の欲求を満たそうとする自己志向の段階、自己犠牲的で相手の期待に従おうとする他者志向の段階、そして自分の欲求に正直に直面する移行期を経て、自他両方を尊重し誰をも傷つけない非暴力の道徳性へと発達するとした。しかし Gilligan はそれを文学作品等、逸話的データで示すだけで実証的な検討はほとんど行っていないし、Skoe 等²²⁾による評定法を使った実証的な研究では、横断的研究でも縦断的研究でも Gilligan の仮説に合う発達傾向は見られていない²³⁾。Gilligan の道徳性は Kohlberg の発達段階論と対比させるようなものではないことが示されている。

また発達段階でなく、配慮志向 (care orientation) と公正さ志向 (justice orientation) のどちらを使うかに関する性差についても、Jaffe & Hyde (2000)¹⁰⁾が113の研究のメタ分析を行っているが、配慮志向は160サンプルの内73%で有意差はなく、男女とも両方使っていたし、公正さ志向も95サンプルの内72%で有意差は見られなかった。Gilligan の仮説と違って、ジェンダーとの関連は見られないことが示された。但し現実の生活での葛藤について述べる時は、女性是对人的な問題を取り上げやすいという意味で配慮の道徳性を使いやすい傾向はあるが、道徳的な枠組みが男女で異なることはないといえる。そして男女にかかわらず問題によってどちらを使うかが異なり、以下の①から③の対比の前者においては公正さ志向、後者では配慮志向が使われやすいとまとめられている²⁷⁾。① Kohlberg 流の仮設的な葛藤場面あるいは「どうすべきか」の問い/現実生活での葛藤場面あるいは「自分だったらどうするか」の問い、② 公的領域の問題/私的領域の問題、③ 権利が関与する社会的状況/家族等の個人的問題。

どちらの志向を使うかは必ずしも一貫性があるわけではなく、Kohlberg 流と Gilligan 流の課題で同じ志向を使った者は29%だけであり²⁸⁾、Kohlberg

課題、Gilligan 課題内での一致率は66%⁷⁾、53%²⁶⁾と必ずしも高くなく、2年後の縦断研究で50%は異なった志向を使用したと報告されている²⁴⁾。

以上のように実証的研究は、道徳性発達には2つの志向があり、どちらの方を使いやすいかに関してジェンダーの関与が見られるが、男女ともに両方を使うこと、問題によってどちらを使うかが異なることが示されているといえる。

4. 文学作品に見られる2つの道徳性

2つの道徳性は文学作品の中でも対照的な形で記述されているので、以下に例を2つあげてみる。第1は男女の道徳性として、第2は強者と弱者の対比で描かれている。

ユン・チアンの「ワイルド・スワン」¹⁾は、中国人女性による自伝的な小説だが、父親が文化大革命の破壊について毛沢東に手紙を書く決心をする時に、共産党幹部の父母が以下のようなやりとりをする場面がある。父「他に何ができる？ 僕はどうしても言わなければならない。何か効果があるかもしれない。いや、たとえ何も期待できないとしても、僕は自分の良心にかけて、言わなければならない」母「そんなに良心が大切なの？ 子どもたちよりも？ あの子たちが『黒5類』になってもいいのですか？」長い沈黙があった。ややためらいがちに父が口をひらいた。「僕は離婚して、きみに子どもたちを育ててもらわなければならないだろうね」¹⁾

父親は、自分の原則を守り、普遍的に正しいと思われることを貫こうとする。彼は社会全体に公正さを実現させるために、誰かが食い止めねばならないという強い信念を持って行動する。それに対して母親は、子どもへの影響を第一に考え、その状況で現実的に最良な方法を考えている。自分の原則を守るのではなく、直接自分が責任を担っている者への配慮と責任に基づく判断をしている。ここでは2つの道徳性がジェンダーと関連しており、Gilligan の仮説にあった記述である。

遠藤周作の「沈黙」²⁾でも2つの道徳性の対立がドラマティックに描かれている。キリシタン禁圧の

時代のポルトガルの司祭と日本の農民や役人が登場する、踏み絵をめぐる物語である。司祭たちは布教に人生をかけ、神への信仰=自分のもつ原則に則った行動をして、何があっても信仰を守り、踏み絵を踏まない。ところが崇拜されていたフェレイラ司祭が転び、やがて主人公のロドリゴ司祭も転んでしまう。彼らは弱さから拷問に負けて転び、以後挫折した者として生き、日本名をもらい日本人の妻を与えられたと歴史書には記されている。彼らはキリストの教えを伝えるという自らの使命を捨て去っただけでなく、以後の日本への布教をも不可能にしてしまった。その行為は神への裏切りといえる。しかし彼らが転んだのは、弱さからではなく、自分が転ばないために拷問を受け続ける農民を救うためであったのである。つまりキリスト教の布教という正しさの実現から、自分の行動ゆえに苦しめられている人に対する責任を取ることへと目指すものが変化し、普遍的な価値を追求高レベルの者がそれを棄てて具体的な他者の期待に従う行動、他者を傷つけることを避ける行動を選んだ生き方の小説化といえる。

彼らが踏み絵を踏む時、次のようなキリストの声を聞く。「踏むがいい。お前の足の痛さをこの私が一番よく知っている。踏むがいい。私はお前たちに踏まれるため、この世に生まれ、お前たちの痛さを分かたため十字架を背負ったのだ」²⁾ この言葉は神への信仰=自分のもつ原則を守る行動だけでなく、結果的に神を裏切ることになっても具体的な他者を配慮する行動を、神は認めていることの記述であると思われる。Gilligan は女性の判断は低レベルではなく、別の発達経路なのだとしたが、遠藤周作も歴史に残るようなヒロイックな強い行動ではなく、歴史に埋もれてしまったもう一つの声を取り上げ、それが棄教という低レベルのあり方なのではなく、新たな信仰という異なった高レベルのあり方であることを描いたと考えられる。

この小説では Kohlberg 流と Gilligan 流の判断を下すのは男女という違いによるものではなく、一人の人間が両方の志向をもち、状況によってどちらを使うかが変わることが示されている。前節で、ど

らの志向を使用するかは男女の違いでなく問題によって異なるとする実証的データを示したが、状況によっては Kohlberg 流の道徳性をもつ者も Gilligan 流の判断をするようになること、そして男性中心主義的な見方ではそれは挫折であり、発達の退行ととらえられるが、正しさのとらえ方の違いであることが示されているといえる。

5. 2つの道徳性の構成に関与する要因

3節、4節を通して、2つの道徳性は Gilligan が指摘した程、また経験的に思われている程ジェンダーとの関連は強くなく、問題や状況によってジェンダーと関係なく使用されること、しかしその使われ方は人によって異なり、ジェンダーとの関連もないわけではないことが示されているが、ではこの2つの道徳性はどのようにしてもたれるようになり、何が使用されやすさと関連するのだろうか。Gilligan は2つの道徳的志向とジェンダーとの関連をジェンダーによる経験の違いによって説明しているの⁵⁾⁷⁾⁸⁾、それを参考にしながら考えてみる。

Gilligan によれば、男性と女性では養育者である母親が同性か異性かの違いがあり、また遊びの形態が異なり、そのことが志向される道徳性を規定するとされる。つまり女性は母親と同性のため、「自分」を作るにあたって男性のように母親を自分から切り離すことを目指さなくてすむ。大きな集団で競争的な遊びをすることを好む男子と違って、親密な小さいグループで遊ぶことを好む女子は、けんかをしルールに基づいて解決するという対処をとらず、人間関係を維持することに向かいやすいことが2つの道徳性を導くとされる。

また乳児期からある2つの関係—不平等 (inequality) の関係と愛着 (attachment) の関係—のどちらが優位かが男女により異なることが2つの道徳性の構成に影響するとしている。乳児は小さくて無力なため力ある者に頼らざるをえず、不平等の関係に置かれているが、その一方で愛着対象に対しては効力をもつことができる。不平等の関係に関しては、子どもは早く発達・独立し平等な関係になろう

とする一方、愛着の関係に関しては愛着対象から離れないでいることが重要で、関係を維持しようとする。男女とも両方の関係をもつが、男児は不平等の関係が優位な父親に同一視するため平等と独立へと志向し、女児は愛着対象である母親に同一視するため母親との関係を維持しようとし、そのあり方が配慮と責任の道徳性につながると Gilligan は論じている。

この仮説についてはまだ実証的な検討はなされていない。しかし Lollis ら¹⁶⁾は直接的な検討ではないが親子のやりとりを観察して、兄弟げんかに対する父母の介入の仕方が公正さに基づくものか配慮なのかを見ている。その結果父親は公正さに基づく理由が多く、母親は配慮が多い傾向が見られたが、男児と女児それぞれに対する理由づけでは差はないことを示している。自分に向けられるしつけの仕方で差がないという結果に対して Walker²⁷⁾は、Gilligan 理論への間接的な反証としているが、しつけの理由づけにおいて異なる両親に同一化することにより、そのような道徳的志向を構成しやすくなると考えることも可能である。

Gilligan は2つの道徳性の源泉を不平等の関係と愛着の関係に求めたが、この2つの関係は、我々もつ2つの対人関係の中の「対称的關係」と「非対称的關係」と関連しているように思われる。対称的關係は自分と同じような他者との間にもたれる平等で相互的な関係で、そこでの正しさは行動の等価性に求められる。自分と他者は同じような存在であり、平等に同じものを受け取ること、相互関係に均衡がとれていることが公正なことと考えられる。公正に対処するためには客観的な基準に基づいて、誰に対しても同じ対処がなされることが必要である。この関係においては自他は取り替え可能な存在であり、自分とは異なる立場にたっても同じ対処を受ける。一方非対称的關係においては自他は異質な存在であり、片方が他方を養護し他方は養護されるような関係にあり、その代表的なものが母子間の愛着関係である。これは誰に対しても成立するものではなく、特殊な関係にある他者との間にのみ成立する関

係である。そしてそこで求められるのは双方の行動の等価性ではなく、相手の欲求や期待に相互に配慮して、その関係においてよい状態を維持することである。

我々は幼少期からある者と特殊な関係をもつと共に、別の他者と自分の行動に応じてそれに見合ったフィードバックを返されるようなかわりももつ。前者は養護されケアされる関係、後者は一個の個としての対処であり、親との関係の中には後者も含まれる。そのような関係は精神分析理論ではそれぞれ母親との関係と父親との関係とされるが、河合¹¹⁾は母性的対処とはわが子に対して特別な配慮をし何があっても受容する対処であるのに対し、父性的対処は自分の子どもかどうかによらず行動や行動結果に応じた対応、公平な対応をすることとしているが、上述の2つの関係と対応しているといえる。そして仲間とのかかわりは親密で非対称的な関係ももたれるが、Piaget²⁰⁾が示したように基本的には平等で相互的なものであり、対称的な関係になりやすい。そのため仲間とのかかわりが Piaget の道徳性の発達を促し、他律的道徳性からの脱却に寄与するのである。

そのように我々は幼少期から2つの関係をもって生きているが、Kohlberg や Piaget は対称的な関係から構成される道徳性を理論化し、Gilligan は非対称的な関係から構成される道徳性を提言した。道徳的問題が対称的な人間間の問題としてとらえられる時は公正さの道徳性、非対称的な人間間の問題としてとらえられる時は配慮の道徳性が使われる。「沈黙」の主人公にとって信者の農民たちは、キリスト教を説くことにより信者になってもらう関係であり、自分の信仰の強さを示し信仰に導く取り替え可能な存在であったが、苦しみの声を聞くことにより自分が責任を担っている特殊な個人、自分のみがその苦境から救える非対称な特別の人間になったことが道徳的志向を変えたと考えられる。

政治・経済等の公的領域は、相手が誰かを問わず抽象的な人間を対象とする領域であり、社会的なかわりである仕事の多くも基本的に取り替え可能な

存在としての自他の問題であることが多く、対称的関係が優位である。一方私的領域としての家庭は特殊な他者、具体的な取り替え不能の他者とのかわりであり、非対称的な関係が優位といえる。そして公的領域・仕事では男性の活躍する場が多く、女性の活動の主たる場が私的領域・家庭であったことが、2つの道徳的志向への性差の関与をもたらした一つの要因と考えられる。男女とも両方の対人関係の中で育ち、両方の関係を生きているのだが、職業につくかどうかやそれに伴う興味や関心のもち方の違いが、使われる道徳的志向に影響すると考えられる。

6. Gilligan 理論の意義と限界

以上のように、Gilligan 理論は発達理論として十分なものではなかったし、ジェンダーとの関連に関しても実証的には検証されず、Walker²⁷⁾は「Gilligan は状況要因を十分考慮せず、個人の傾向の役割を過大評価する誤りを犯した」と結論づけている。しかし問題はあったとしても、男性中心主義の下で考えられた発達理論への批判、新しいアプローチの提言、発達に寄与する経験や要因のとらえ方などにより、Kohlberg 理論だけでなく、発達理論一般や発達心理学に対しても大きな影響を与えたことは確かである。Gilligan 理論の意義・貢献は以下のようにまとめられよう。

Kohlberg は Gilligan の批判を受けて、問題によっては配慮の道徳も考える必要があるとして、特殊な関係—非対称の関係で考慮されやすい道徳性にまで道徳領域を広げて考えるようになった。但し道徳性の形式を備えるのは公正さの道徳性だけとしているが、Kohlberg 理論そのものも微修正された。批判以前は Kohlberg の発達段階は個の中の発達で、広がっていく他者の視点は仮説演繹的に頭の中で考えることが可能であり、状況や個別性を担った他者は必ずしも必要ではなかった。しかし後期には具体的な個人とのやりとり、すなわち他者との対話による合意の形成を重視するようになったのである¹⁴⁾。

Gilligan は配慮の道徳性を「もう一つの声(different voice)」として取り上げたが、現代社会で

はその声の重要性が増している。育児・看護・介護等、比較的家庭内—私的領域で女性により担われてきた配慮を必要とする営みが、社会の変化に伴い社会で担われる仕事—公的領域に変わってきている。医学や産業技術等の進歩により、高齢者や病者となって生きる人々、ケアを必要とする人が増え、また女性の社会進出によって私的領域ではなく公的領域で担う必要性がでてきたからである。社会福祉等の問題を考える時にも配慮や責任の問題を考慮する必要性が増えている。また高齢化社会となり、誰もが養護を受け養護をする立場にたつ機会が増すと共に、非対称的な関係の比重が増大し、配慮と責任の道徳性を使う機会が増えてきている。そこからケア倫理学という学問領域も生まれてきている²¹⁾。

更に2つの発達の筋道があるとするらえ方は、それまで見えにくかった発達過程を顕在化させ、発達をより複合的に見ることを可能にした。特に個の発達として考えられていたアイデンティティ理論への影響は大きく、関係性の中での発達として「分離・独立」ではなく「関係性の再編成」からアイデンティティ形成をとらえる視点をもたらした¹⁷⁾²³⁾。そして Franz 等⁴⁾のように自我発達理論全体を個の発達と関係性の発達の2つの観点から考える理論が提唱され始め、更に配慮への注目が成人期の発達研究を促すことになった¹⁸⁾。また実生活での葛藤を語る方法—仮設的な葛藤場面についてはなく自分の問題を語ってもらい、その声を聞く方法—は、自分の人生を語ってもらい、そこから本人のあり方を探ろうとする「ナラティブ研究」の前駆的意味をもっていたといえよう。

但し自立・自律した人間として社会に出て行く上で、また社会を担っていく上で、個々の状況や力をもつ他者等から独立した判断ができること、あるいは状況にとらわれず原則に基づく判断ができるようになるという Kohlberg 流の発達は重要であるし、他者への配慮の発達においても Kohlberg 流の視点の拡大の観点をもつことは必要である。Hoffman⁹⁾や Eisenberg³⁾の共感や思いやりの発達の基盤にあるのは、自他のとらえ方であり、相手の視点や状況

の理解の問題なのである。

そしてケアの関係においても「自律や権利」は重要である。ケア関係の健全性は、双方が自他の自律と権利を尊重することによって保たれるし、誰がどこまでケアすべきかの問題は分配的正義の問題でもあり、権利や自由、公正さ等の理解が必要である。社会が見えず個人的関係にとらわれ、脱社会的な青年達の増加が指摘されているが¹⁹⁾、まわりの人=具体的他者の視点を取って配慮するだけでなく、より抽象的な集団や社会の視点をとることも含む Kohlberg 流の発達を促すことが必要であろう。

道徳性発達とジェンダーの問題はここ30年近く大きな関心と呼び、Kohlberg と Gilligan 理論をめぐって活発に論議されてきたが、性による違いは大きくなく男女共にもたれる志向であることが示された。今後は、2つの道徳性発達に共通する基盤となる発達の検討、及び異なる対人関係の何がどう働いて2つの異なる発達をもたらすのか、性と関連する部分があれば何が関与してそうなるのかの検討を進めていくことが必要と思われる。

注

本論文の一部は、日本心理学会第72回大会(2008年)シンポジウム「心理学の理論をジェンダーの視点から読み解く—何がどう問題か—」での話題提供、及び日本発達心理学会第20回大会(2009年)ラウンド・テーブル「道徳性発達の最前線を知る」での話題提供において報告した。

文 献

- 1) ユン・チアン(1993)ワイルド・スワン 土屋京子 訳 講談社。(Chang, J. (1991) Wild Swan. Globalflair Ltd.) P. 106.
- 2) 遠藤周作(1966)沈黙 新潮社。P. 268.
- 3) Eisenberg, N., & Mussen, P. H. (1989) The roots of prosocial behavior in children. Cambridge University Press. アイゼンバーグ, N., & マッセン, P. (1991) 思いやり行動の発達心理 菊池章夫・二宮克美訳, 金子書房.
- 4) Franz, C. E., & White, K. M. (1985) Individuation and attachment in personality development: Extending Erikson's theory. *Journal of Personality*, 53-2, 224-256.
- 5) Gilligan, C. (1982) In a different voice: Psychological theory and women's development. Harvard University Press: Cambridge, 岩男寿美子監訳(1986)もうひとつの声—男女の道徳観のちがいと女性のアイデンティティ 川島書店.
- 6) Gilligan, C. (1977) In a different voice: Women's conceptions of self and morality. *Harvard Educational Review*, 47, 481-517.
- 7) Gilligan, C. & Attanucci, J. (1988) Two moral orientations: Gender differences and similarities. *Merrill-Palmer Quarterly*, 34, 223-237.
- 8) Gilligan, C., & Wiggins, G. (1987) The origins of morality in early childhood relationships. In J. Kagan & S.Lamb, (Eds.) *The emergence of morality in young children*. Chicago: University of Chicago Press. 277-305.
- 9) Hoffman, M. (2000) Empathy and moral development: Implications for caring and justice. Cambridge University Press, 菊池章夫・二宮克美訳(2001)共感と道徳性の発達心理学—思いやりと正義とのかかわりて 川島書店.
- 10) Jaffe, S., & Hyde, J. S. (2000) Gender differences in moral orientation: A meta-analysis. *Psychological Bulletin*, 126, 703-726.
- 11) 河合隼雄(1976)母性社会日本の病理 中央公論社.
- 12) Kohlberg, L. (1969) Stage and sequence: The cognitive-developmental approach to socialization. In D. A. Goslin (Ed.) *Handbook of Socialization Theory and Research*. 永野重史監訳(1987)道徳性の形成 新曜社.
- 13) Kohlberg, L. (1981) *Essays on Moral Development: volume-1 The Philosophy of Moral Development*. Harper & Row: San Francisco.
- 14) Kohlberg, L., Levine, C., & Hower, A. (1983) A moral stages: A current formulation and a response to critics. Karger. 片瀬一男・高橋征二訳(1992)道徳性の発達段階—コールバーグ理論をめぐる論争への回答 新曜社.
- 15) Kohlberg, L. (1984) *Essays on Moral Development: volume-2 The Psychology of Moral Development*. Harper & Row: San Francisco.
- 16) Lollis, S., Ross, H., & Leroux, L. (1996) An observational study of parents' socialization of moral orientation

- during subling conflicts. *Merrill-Palmer Quarterly*, 42, 475-494.
- 17) 岡本祐子(1996)女性の生涯発達とアイデンティティ—個としての発達・かかわりの中での成熟—北大路書房.
- 18) 岡本祐子(1997)中年からのアイデンティティ発達—の心理学—成人期・老年期の心の発達と共に生きることの意味—ナカニシヤ出版.
- 19) 大澤真幸・町澤静夫・香山リカ(1998)心はどこへ行こうとしているか—マガジンハウス.
- 20) Piaget, J. (1930) *Le jugement moral chez l'enfant*. Institut J. J. Rousseau: Geneve. ピアジェ(1958) 児童道徳判断の発達—大伴茂訳—同文書院.
- 21) 品川哲彦(2007)正義と境を接するもの—責任という原理とケアの倫理—ナカニシヤ出版.
- 22) Skoe, E. E., & Marcia, J. E. (1991) A measure of care-based morality and its relation to ego identity. *Merrill-Palmer Quarterly*, 37, 289-304.
- 23) 杉村和美(2006)女子青年のアイデンティティ探求—関係性の観点から見た2年間の縦断研究—風間書房.
- 24) Walker, L. J. (1989) A longitudinal study of moral reasoning. *Child Development*, 60, 157-166.
- 25) Walker, L. J. (1991) Sex differences in of moral reasoning: In W. M. Kurtines & J. L. Gewirtz (Eds.) *A Handbook of moral behavior and development*, vol-2, Erlbaum: Hillsdale, NJ. 333-364.
- 26) Walker, L. J., de Vries, B., & Trevethan, S. D. (1987) Moral stages and moral orientations in real-life and hypothetical dilemmas. *Child Development*, 58, 842-858.
- 27) Walker, L. J. (2006) Gender and morality. M. Killen, & J. Smetana (Eds.) *Handbook of Moral Development*. Erlbaum, 93-115.
- 28) Wark, G. R., & Krebs, D. L. (2000) The construction of moral dilemmas in everyday life. *Journal of Moral Education*, 229, 5-21.
- 29) 山岸明子(1987) コールバーグ理論の展開—ギリガンの批判を中心として—永野重史監訳—道徳性の形成—新曜社, 193-210.
- 30) Yamagishi, A. (1987) Japanese culture and morality. 道徳教育国際会議発表論文集, 108-111.
- 31) 山岸明子(1987) 日本の伝統文化と将来の道徳—東京海上各務記念財団—第7回懸賞論文受賞作品集—有斐閣—167-206.
- 32) 山岸明子(1990) 二つの道徳性と対人関係—順天堂医療短期大学紀要, 1, 48-56.
- 33) 山岸明子(1992) 責任性理論—ギリガン—日本道徳性心理学研究会編—道徳性心理学—道徳教育のための心理学—北大路書房, 145-156.

(平成21年11月27日 受付)
(平成22年4月23日 受理)